

# 信仰の足跡

金原を歩く

匠瑛探訪

-76-



新田庵の墓碑

るのがこの地の豪族・金原氏の存在でした。宗祖日蓮の弟子に金原法橋かなはらのほしきがあり、一族が信者となりました。

妙大寺や三社神社のある本村から1・5キロほど離れ、林に囲まれるように金原新田集落があります。ここに「熊切」姓くまきりがあつて、1608年に熊切隼人はやとが集落を開いたという言い伝えがあります。隼人なる人は1648年の記録で確認でき、伝承を裏付けるものといえるでしょう。

集落前の小高い山林の中の墓地に10基ほどの墓石が並んでいます。この墓石は明治になつて土の中から掘り出したものとされ、地域の人たちの「信仰の足跡」を伝えています。

金原区(飯高地区)は市内北部に位置し、多古町と接し、飯高から多古に通じる県道79号線沿いに集落があります。この地域の歴史を語る中で2つの大きな出来事がありました。1330年代以降、隣接する安久山あぐやま、片子、大堀、飯高地域の寺が日蓮宗に改宗しますが、きっかけともいえ

流罪となりました。これ以降、不受不施信仰は表面上でできなくなり、指導する僧や信仰農民は隠れて活動することになりました。1794年と1838年に全国的に不受不施派農民に対する取り調べがあり、関東では江戸、上総、下総が特に厳しかったとされます。

市域では1700年ごろから1840年ごろまでの間に、400人ほどの信仰農民と50人近い不受僧が確認されています。その活動の場が「隠れ庵」といわれるもので、多古周辺に10か所余りが存在したとされ、そのひとつ「金原新田庵」が先に紹介した墓地周辺にあったものと考えられます。

掘り出されたという墓石は、1794年の取り調べ前に幕府から「村内に不受僧の墓石を放置してはいけない」との通達により土中に埋めたようです。

1876年(明治9年)明治政府から不受不施派の信仰が許され、200年以上にわたる禁教の歴史が終わりました。

「不受不施信仰」を今に伝える墓石群がこの地にあります。

岡秘書課広報聴班

☎73・0080